
花あかり

二葉一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花あかり

【Nコード】

N9148K

【作者名】

二葉一葉

【あらすじ】

オトコの子とオンナの子がそれぞれに想いを寄せる一組のカップル。実らなくても穏やかに育んでいくその想いの行方は・・・。

恋に落ちる。

ぼんやりとしていた。

先生が読む『春暁』をぼんやりと聞いて、黒板に書かれたその詩をぼんやりと眺めてた。

特に眠いわけじゃなくて、退屈っていったら退屈だったけど、こっそりメールやらマンガやら別の何かをしようって気もなかった。教科書を机に広げて、左肘で頬杖をつく。

前に座る池山はべつたりと机に伏して寝てるし、その隣の東さんは首をもたげて携帯メールを打っている。

クラスのほぼ全員が、このふたりと同じような状況だって、見回さなくてもわかる。

オレだって、寝てるのと変わらないほどに、ぼんやりとしてたんだ。

「ねー、これって、こうだっけ？」

ふいに聞こえた小さな声は、野太い声で通釈をしてる先生とは違う。

「ごめん、これ、教えてくれる？」

同じ声が聞こえてきたのは、オレの右隣の席。

人懐っこそうな瞳が、オレに向いていた。

「え？何？」

「これ、次の数学なんだけどね？」

いいとも嫌だとも答えないうちに、彼女はゆっくり机をこっちに寄せてきた。

彼女の机に広がる、数学の教科書と計算式が書かれてるルーズリーフ。

「ここの解き方がわからなくて……。絶対今日、当たるんだよねえ。」

持つてるシャーペンを一回転させて、彼女は小さくため息を吐く。数学の宿題は出てなかったはず。

だけどあの先生は、今日の日付を中心にランダムに当ててくる。当たって答えられなければ、予習をしてないのか、とねっちりと嫌味を言う。

だから次の時間の数学だけは、予習率が高い。

「これ、どうことかなあ？」

オレの机に教科書を半分置けるほどに寄ってきて、彼女はへらりと笑った。

視線を彼女が指す教科書のページに移して、じっくりとその問題を見た。

ベクトルの三角形面積、か。

ちらりと先生を見れば、相変わらず喋り続けながら、通釈を黒板に書いていた。

オレが教えてくれるのを待ってる視線が右隣からひしりと感じてる。少しだけ、考える振りをしてから、自分のシャーペンを握った。

「これはさ・・・」

「うんっ。」

小さな声でゆっくりと正確に、できればわかりやすく、シャーペンをはしらせて教える。

彼女は静かに耳を澄ませて頷きながら、視線はずっとオレの指先を追っていた。

「これで、やってみな。」

「うん。」

教えてすぐに理解したのか、彼女は小さく微笑んで、問題を解きはじめた。

安倍川あへかわ卯月うづき。

変わった名前だとは思ったけど、特に目立つような女子でもない。だからって地味で大人しいだけでもないのは、この時間でわかった。そして、彼女は考え込むと、唇をキュッと突き出す癖があるらしい。セミロングの髪をかけてる左耳に花のピアスが揺れる。

ぼんやりと眺めてた。

彼女が揺れるピアスカ、どっちでも良かったけど、ただぼんやりと眺めてた。

「あ、こうだ。どう？春日君？」
・・・っ！

勢いよくかち合った目線を、とっさに逸らした。

それがとても不自然だった気がして、急に顔が熱くなったのがわかった。

「春日君？」

なんか、ヤバイ。

このまま何もなしのように彼女と視線を合わせたら、なんか、ヤバイ気がする。

さっきまでぼんやりとしてた頭の中が急にぐるぐると回り出す。

自分は数学の予習してたっけ、とか、昼飯は何食べるつもりだったんだっけ、とか、どーでもいいことばかりを考える。

「どうしたの？」

聞こえてきた声に、オレこそオレに聞きたい。

どうもこうもないんだ、心臓がおかしいくらい早く打つ。

「安倍川。」

教室に響いた彼女の名前に、心臓が飛び出すかと、思った。

「は、はいっ・・・！」

「読んで。」

「え、あ、はいっ。」

先生に呼ばれて慌てて返事をしながら彼女は、バタバタと机の上をまさぐって、ようやく見つけたように国語の教科書を持って立ち上がった。

低くもなく高くもない背をピンと伸ばして、落ち着くように一息吐いた彼女は、そのまま『春暁』を読み始めた。

教室に広がる、彼女の声。

高くも低くも、細くも太くもなく、癖があるわけじゃなく、すんなりと耳に入ってくる声。

心地が良い。

こつちを向かない彼女をこつそりと覗き見て、心臓の高鳴りを落ちつかせる。

この、彼女の姿に、声に、ここまで魅せられてるのは、このクラスでオレだけだろうな。

そう思うと思わず笑ってしまう。

寄せたままの机に視線を戻すと、数学の教科書とルーズリーフがそのままあった。

ルーズリーフに新しく書き足された計算式に目をやって、余計なことばかり考えてる頭に入れ込んだ。

「あー、びつくりしたあ。・・・当てられちゃった。」

読み終えて座った彼女が、オレに向かつて笑う。

今度は目を逸らさずに、彼女と向かい合う。

コツン、とシャーペンで机に当たった。

「あつてるよ、これ。」

「え、あ、ほんと？良かったあ。」

今度は彼女が先に視線を外して、自分が解いた計算式を見て嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう、春日君。助かっちゃった。説明、わかりやすかったし、さすが学年トップスリーっ。」

ついさつき教えてたときまで、何とも思わなかったこの距離が、たった数分後にはムズリと歯がゆくて落ち着かない距離に変わった。

あー、参った。

ぼんやりしているうちに、恋に落ちるとは。

勘弁してくれよ、と誰に対してなのかわからず助けを求める。

数学の教科書とルーズリーフを片付けて、彼女の机が元の位置に静

かに戻っていく。

そうだ、戻るなら、いまだ。

スツと息を吸って、一気に吐き出す。

「そーいっいたら、ワタも、だろ。」

「え？綿貫君？・・・そーでもないよ？ってあたしが言つのも変だ
けど。」

「でも1年のとき、学年5番内だったじゃん。」

「あー・・・、そーだねえ。でも、ベンキョー嫌いって言ってるん
だよ？嫌みだよ。」

「そりゃ嫌みだな。」

顔を見合わせて、ふたりして笑う。

彼女の名前を知ったのは、ずいぶん前だ。

目立つような女子でもなかったのに、名前だけは聞いていた。
わたぬき綿貫朔也さくやの彼女として、知っていた。

恋をしている。

喉の湯きに我慢できなくて、ゴクゴクツと飲んだ豆乳いちご味がまったりと喉にへばりついた。

1日1本の豆乳は、飲むべきタイミングを考えた方がいいかも。

これだからあたしは、せつかちだと言われるんだ。

一緒に買ったコロツケパンとジャムパンをぶら下げて、教室に向かった。

ふと、廊下の掲示板に貼られてるプリントに目が留まる。

『中間テスト結果』とあって、その下に20人の名前が連なっている。

いまだき成績順位を張り出すのもどうかと思う。

だけど、上位者だけを張り出すから確実に入っていない者たちはあまり気に留めない。

10番台は入れ替えが激しいけど、10番内になればそれほど入れ替わることもない。

常連連中なつた自分の名前の上の名前を見る。

今回の1番は、自称『ベンキョー嫌い』。

・・・おもしろくない。

自分より後に連なる名前を一通り見て、もと来た廊下を歩き出す。

『ベンキョー嫌い』の首席は、たぶんひとりでいる。

あたしは足取り軽く、階段を駆け上がった。

「ワタ！」

予想どおりの場所に、予想どおりひとりでした。

素速く状況を見て、もうお昼を食べ終わったことを確認する。

「あたしを見て怪訝な顔するのは失敬じゃないか、綿貫朔也。」

「・・・」

「しかも無言のため息とは、友を失うぞ。」

何か言いたげに向けてきた視線を無視して、彼の隣に腰を下ろす。すかさず綿貫はその距離をあけた。

「・・・淋しがつてると思ってた来てやったのに。」

「頼んでない。」

「こんなところでひとりでゴハン食べてマンガ読んでるのに？見るからに淋しそうなのに。」

「余計なお世話。」

「つぶおふおんなふお。」

「何言つてんのかわかんねえよ。」

ジャムパンを頬張りすぎたらしい。

喉につかえそうになりながら、豆乳いちご味の力を借りて流し込む。綿貫は嫌なものを見るようにあたしを見てから、読んでいたマンガに視線を戻した。

「強がんなよ。」

もう一度言つてあげようかと思つてやめた。

屋上の扉から差し込む日差しに綿貫の左耳のピアスが青く光って、綺麗だった。

「今回1番だったんだねえ。」

呟きにも似たあたしの言葉に、彼は何がって顔をした。

まあテスト順位に興味がないのは重々承知だけど。

「中間、張られてたよ。見てない？」

「知らね。」

「だろうね。2番は春日で、あたしは3番。」

そこまで言つて、自分もそれほど注意深く気にしてるわけでもないからそれ以降はうる覚え。

いつもいるメンバーの順番が多少違うくらいだろうし。

「つうか、1番取るの初めてじゃないの？」

「そーだっけ？」

「そーでしょ。・・・アベちゃんに褒められてないの？」

「・・・ねえなあ。」

残りのジャムパンを頬張った。

二口かよ、って呆れたような声が聞こえたけど、無視をした。

おいしく食べられればそれで良し。

綿貫は相変わらずマンガを読み続けてるし。

テストの順位を知らねって言って、ひとりでゴハン食べて、マンガ読んで、ピアスは青くて、カノジョに褒められなくて、拗ねている。

・・・ガキ。

『好きな子がいる。』

綿貫朔也にそう言われたのは、1年前、この場所だった。

入学式で人生初の一目惚れして1ヶ月後に失恋。

あんなのは恋じゃなかった。

うわべしか見てなくて好きだ好きだと騒いでただけのあたしは恋に恋をしてた。

恋する少女のあたしが可愛くて、コクってうまくいけば万々歳。

振られても、”失恋したあたし”を楽しむんだと、思ってた。

「まゆずみ 黛。」

ゴクリと飲み込んだジャムパンの塊に、返事が詰まる。

「先、行く。ひとりじゃ淋しいだろーから、これ貸してやるよ。」

そつと頭に置かれたマンガの下から、僅かに笑う綿貫が見えた。

ジャムパンが甘すぎて、ぎゅううううと心臓が苦しくなって、頷くように俯いた。

遠ざかる足音に、深く深く息を吐く。

置いてったマンガは、ギャグマンガ。

なのに彼は、ずっとつまらなそうな顔で読んでいた。

コロッケパン、から食べればよかった。

告白、なんてしなればよかった。

しなれば、恋に恋してたあたしで、すんだのに。

あたしは彼に、恋をしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9148k/>

花あかり

2010年10月15日22時05分発行